

# 令和1年度 職員海外研修（調査・研究）報告

## 1. はじめに

令和1年度6月22日（土）から8月10日（土）まで、職員海外研修の一環として、本学の国際交流協定校の一つであるカルガリー大学（カナダ・アルバータ州）の集中英語研修の受講（6月24日（月）～7月26日（金））と、現地の高等教育機関及び日本語学校を対象とした調査（7月29日（月）～8月8日（木））を実施した。



## 2. 調査・研究日程

7月29日（月）	カルガリー大学 訪問
8月1日（木）	アルバータ大学 訪問
8月3日（土）	ブリティッシュコロンビア州バンクーバーへ移動
8月4日（日）	バンクーバー日本語学校 訪問
8月5日（月）	ビクトリア大学 訪問
8月7日（水）	ブリティッシュコロンビア大学 訪問
8月8日（木）	バンクーバー日本語学校訪問
8月9日（金）	ブリティッシュコロンビア州バンクーバー出発
8月10日（土）	帰国

## 3. 調査テーマ

「カナダにおける日本への留学のニーズと課題」

### (1) 調査内容及び目的

現在、日本では2020年を目処に受入留学生数30万人を目指す「留学生30万人計画」が施行されている。独立行政法人日本学生支援機構の「外国人留学生在籍状況調査<sup>1</sup>」によると、ここ数年で留学生数は大幅に増加し、30万人まであと少しという状

<sup>1</sup> 独立行政法人日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」

[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/index.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html)

況となっている。留学生の出身地域別の割合は、アジア地域からの留学生が9割以上を占めているが、日本人留学生の留学先地域は、欧米先進諸国の割合が非常に高い。文部科学省の『『留学生 30 万人計画』の骨子』においても、「欧米先進諸国からの留学生受入れ数は、日本人が欧米先進諸国に留学する数の 10 分の 1 程度と大きくバランスを欠いており、相互交流の観点から受入れ数の大幅な拡大が求められる<sup>2</sup>」と記載がある。北米は日本人留学生の留学先として大きな割合を占めているが、本学の状況を見ても、アジア地域からの留学生が大半を占めており、欧米先進諸国出身の留学生の数は決して多くない。

そこで、欧米先進諸国であるカナダにおける日本への留学のニーズと課題をテーマに、学生が留学に求めるものは何かという視点で調査を行った。日本語を学ぶ現地学生の傾向や日本語教育に携わる教員の方々のご意見を調査し、分析することにより、カナダにおける日本への留学のニーズやそこから見える本学留学プログラムの課題点を把握し、本学の留学生受入れ体制を強化することを目的として調査を行った。

## (2) 調査・訪問先

### ① カルガリー大学（訪問日：7月29日（月））

カルガリー大学と本学は 2016 年 1 月に国際交流協定を締結し、毎年、カルガリー大学から多くの学生を日本語・日本事情プログラムで受け入れる等、活発な相互交流を行っている。

### ② カルガリー日本語学校

カルガリー日本語学校は 1975 年に日本人子弟のための学校として開校された。日本語をルーツにもつ子どもたちの言語習得を目的として開校された、いわゆる継承語<sup>3</sup>教育のための語学学校であったが、1988 年のカルガリー冬季オリンピックに向けて、大人向けのコースが開講されたのを皮切りに、最近ではコミュニティベ-

---

<sup>2</sup> 文部科学省『『留学生 30 万人計画』の骨子』とりまとめの考え方に基づく具体的方策の検討（とりまとめ）より

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249705.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249705.htm)

<sup>3</sup> “現地生まれの子どもの場合、生まれて初めて覚えた言葉は親の母語であることが多いが、学齢期になって現地語を使って学習するようになると、どうしても親のことばが「弱いことば」で現地語が「強いことば」になっていく。つまり幼少のころは親の母語が子どもの「母語」であったが、「現地語」が強くなるにつれ、子どもの「母語」とは言えない状況になり、かといって親のことばが「外国語」になるわけではない。このような状況の親のことばを「継承語」と呼ぶのである。”『カナダの継承語教育その後—本書の解説に変えて』中島 2005 pp.156-158

スの語学学校として、第二外国語としての日本語を学ぶ場所になっている。

③ アルバータ大学（訪問日：8月1日（木））

アルバータ大学は、アルバータ州の州都エドモントンにある州立の総合大学である。アルバータ大学にある高円宮日本教育・研究センターは、カナダのみに留まらず、北米における日本語や日本文化教育に大きく貢献しており、今回の調査で必ず訪れたい大学のひとつであった。

④ バンクーバー日本語学校（訪問日：8月4日（日）、8日（木））

バンクーバー日本語学校並びに日系人会館は、カナダにおける日本語教育・日本文化の継承・普及に寄与している。1906年に設立された、世界的にもとても古い歴史を持つ団体である。



⑤ カナダ日本語教育振興会（the Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)）（訪問日：8月5日（月））

カナダにおける日本語教育の振興を目的とするカナダ日本語教育振興会（以下、CAJLE）の2019年度年次大会が、8月6日（火）、7日（水）の2日間にわたり、ブリティッシュコロンビア州ビクトリア市にあるビクトリア大学にて開催され、私はプレ大会イベントである「日本語教師情報交換会」に参加した。

⑥ ブリティッシュコロンビア大学（訪問日：8月7日（水））

ブリティッシュコロンビア大学は、1908年に創立された歴史ある州立大学で、世界大学ランキングで常に上位にランクインし、日本語教育に関しても、カナダ国内で最も盛んに行われている名門大学である。

## 4. 調査結果

(1) 本学国際交流センターが主催する日本語・日本事情プログラムについて

過去参加した学生からは非常に高い評価を得ており、特に、本学学生との国際交流会館での協働生活については、参加学生の満足度が高く、良いセールスポイントになっている。教

員からの聞き取りにおいても、日本語の授業時間が確保されており、単位認定に必要な時間数にマッチしている。日本語をしっかりと勉強することができ、単位認定が可能な留学プログラムとしてアピールすることができる可能性がある点を評価された。

日本の大学の短期留学プログラムは、文化体験等に重点が置かれ日本語の授業時間数が少ないため、単位認定ができないものが多い印象を持たれていた。留学プログラムを選ぶ際、学生・教員両方の立場から見ても、単位認定が可能かどうかということが大きなポイントであり、日本語の授業以外の活動（小学校訪問や書道、茶道などの日本文化体験等）など、授業以外の活動も評価、内容、時間数等が明記された証明書等を作成し、単位に振り替える可能性が出てくるとのアドバイスを得た。



## (2) 学生へのインタビュー結果

調査・訪問先での学生へのインタビューを通じて、日本語を学習する動機の大半が日本文学、テレビ番組に触れる機会が多く、関心を持ったきっかけとなっていた。また、高校生のときに第二言語として日本語を学び、そのまま継続して学習している、また、外国語を勉強する方が将来の役に立つと思ひ、勉強し始めた、などの動機もあった。

実際に留学を経験した学生には 1 名しかインタビューができなかったが、関心があるが留学に至らない理由として、日本語能力に自信がない、海外での生活に不安がある、また、海外で生活するのに必要な行政関係の手続き（査証や税金等）が全く分からないなど、不安に関する発言を多く聞いた。生活に関する一般的な情報が貰える、到着後に何かサポートがあると分かると安心できる、といった意見もあり、留学生が不安に思う要素を出来るだけ排除し、万が一の際のサポート体制のアピールが重要だと感じた。

## (3) 教員からの聞き取り

日本語を学ぶ学生には、近年、社会人やリタイア後の受講者が増えている。日本文化への興味が動機として多く、特にバンクーバーでの日本語学習者の特徴として、日本の食文化への関心が高い。英語で学べる日本食のクッキングスクールは大変人気があり、日本の食文化を絡めたプログラム等があると大人の日本語学習者の関心を集めることができるのではとの提案を得た。

また、日本留学を希望する高校生も多いが、高校生を受け入れてくれる日本の教育機関が

ないため、高校生も参加できるプログラムがあれば、積極的に案内をしたいとの意見を得た。

また、体験学習は、1回だけの体験学習をさせるのではなく、事前準備→体験→事後の振り返りという一連の流れが重要であるとの意見があり、事前・事後の活動・フォローも併せて考えていく必要があると感じた。

学生を送り出すには単位認定可能かどうか重要であり、体験学習を単位にどう結び付けるか、また、多くのプログラムは体験学習について、何も謳っていないことが多いため、事前にはっきりと内容や目的、時間数を明記すると良いというアドバイスが得られた。

## 5. おわりに

現地での調査は私にとってチャレンジの連続であった。調査のためのデータや資料の収集、訪問先へのアポイントメント、現地の学生への英語でのインタビュー等、すべてが初めて行うことであり、きちんと調査をすることができるか、不安でとても緊張していた。多くの方のサポートをいただき、無事に現地の大学及び日本語学校等で調査を行うことができた。

自ら課題を設定し、実際に調査を行うことで、カナダにおける日本留学のニーズと、本学の課題を発見し、調査をやり遂げることができたことは、自分への自信に繋がることとなった。今後は、この経験を実際の留学プログラムや、協定校との業務他、本学の教育研究環境を向上させるため、所属課での業務の様々な場面で活かしていきたい。

以 上